

*Economic Activities*, Saigon: 1959; L. Woodruff, *The Study of a Vietnamese Rural Community: Administrative Activities*, 2 vols. Saigon: 1960.)

著者は、オリジナルのテキストに、他の2人の研究成果を加味して（生活様式と経済体系、村落行政と法律）、このメコンデルタにある一村落の全貌をミクロに描き上げようとしている。こうした、いわば息の長い研究は、動乱果てしない南ベトナムのような社会ではきわめて困難であって、序文を寄せたフランスのインドシナ研究の権威 Paul Mus が指摘しているように、今は古典となっている仏植民当時の研究成果との断絶を埋めるという意味でも、このモノグラフはきわめて貴重なものであると思われる。

内容は、結論の章をいれて全部で11章よりなり、(1)村の歴史、(2)地形と居住様式、(3)宗教と民間信仰、(4)血縁体系、(5)社会集団としての家族、(6)生活様式と経済体系、(7)村落行政と法律、(8)祭礼委員会、(9)社会経済的分化、(10)社会経済のプロフィールと社会移動、それに若干の附記がついている。各章とも、詳細を聞き取りおよび観察、短い歴史的説明、それに多数のケース・スタディを網羅してミクロな筆致が村落の生活を再現してゆく。専門項目が多岐にわたるために、もちろんここでは、その細目を紹介したり、評価したりすることはできないけれど、一つの小宇宙としてのこうした村落の生活全体のイメージを読者に伝えるという点では、この書物は、その希少価値というメリットを除いても、充分成功しているものであろう。

そこに描かれた村落住民の生活は、しかしながら、決して喜ばしいものではない。生活空間は狭く、技術が低いので生活は貧しく、人々は信心深い（というよりは迷信深い）。戦乱の絶えなかったこともあろうが、人々は村落レベルでさえ協同態勢を組織しえず、家父長家族と若干の信者グループ（カオダイ教の一派やマイノリティであるカトリック信者集団など）が成員の忠誠を吸収している。それは、例えば、家族単位の行事（冠婚葬祭や法事など）に全く家計とは不均衡な支出をするというような非合理的態度に現われたりする前近代的な生活なのである。

もしわれわれが一昔前の文化人類学者のように好奇心だけでこのような社会の問題を取り扱うことを

否定する立場に立つなら、この書物のもっている価値は、そうした意味での問題提起でさえあろう。望むらくは、本書のようなミクロな分析を全体社会レベルの諸研究（例えば、Nguyen Kien, *Le Sud-Vietnam depuis Dien-Bien-Phu*, 1963; Nghiem Dang, *Vietnam—Politics & Public Administration—1966* など）に繋いでゆく研究が輩出するように願うものである。

なお、一言不満を述べれば、煩雑であり、一般性もないので省かれたベトナム語（本文中の）の抑揚記号はつけておいてほしかった。（サイゴン出版のオリジナルでは、原語は正しく表記されている。）

（中野秀一郎）

陳孺性編「袖珍緬華辞典」ラングーン：イーセイ出版社、1963. 519 p.

ビルマ語の辞書は今までに各種各様のものが知られているが、1963年に新しく緬華辞典が公刊された。本書は題名にもあるように、12×9cmの小型(袖珍)版である。

編者は、これとは別に「綜合緬華大辞典」、「模範緬華大辞典」の二種を編纂している。前者は、Robert Shafer, *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*. 1963. p. 7 に Sein, Chen Yee, *The Comprehensive Burmese-Chinese Dictionary, Mien-Hua Ta Tz'u-Tien*. Peking & Hongkong (at press), pp. ca. 2000 と紹介されているものであるが、鹿児島大学の荻原弘明助教授の書簡によれば、これは編者が15年かけてまとめたが未刊だとの事である。その abridged edition が「模範緬華大辞典」で、1962年に出版されたが早くも絶版になっており、駐ビルマ日本大使館の石堂事務官からの連絡によれば、ラングーン市内でさえも残念ながらもはや入手不能だという。

従来の各種ビルマ語辞典の内、内容的に最も充実しているのは、*Judson's Burmese English Dictionary*; revised & enlarged by R.C. Stevenson & F.H. Eveleth. Rangoon: 1953. p. 1061. であるが、袖珍辞典はページ数からいってもこのジャドソン辞典の半分、収録語彙数からいっても1/3足らずにすぎないとはいうものの、ジャドソン辞典に収録されていない単語や語句、ことに〈血液銀行〉〈水

爆>等の新しい単語が多数掲載されていること；綴字と発音とが合致しない特殊な発音を逐一指摘していること；従来の英緬辞書にはみられない意味の新規説明があること等、利用価値はきわめて高い。一方、文例がほとんどみられない；各単語に発音表記がない；文字の配列順序が従来の辞書（例えばジャドソン）とは異なっているばかりか、W. S. Cornyn & J. K. Musgrave, *Burmese Glossary*. New York: 1958. にも従っておらず、独特の配列形式をとっているため、従来の辞書を使い慣れた人にはかえって不便である等の難点がある。

編者は、現在 Burma Historical Commission のスタッフの一人で、漢籍史料を基にビルマ史を研究中の歴史学者である。発表した研究論文も少なくなく、特に *B. B. H. C.* に掲載された論文 “The Chinese Inscription at Pagan” (vol. I no. ii, 1960. pp. 153-157) は、サラブハ（鹿）門で発見された一面がピュー語、他面が漢語の未解読碑文をはじめて解読した論文として、その功績は高く評価されよう。（大野 徹）

Maung Ba Han. *The University English-Burmese Dictionary*. pt. I-X, Rangoon : Hanthawaddy Press, 1951-1966. 2292 p.

1962年の革命政権成立後、ビルマでは次々と新しい英緬辞典が刊行された。例えば *The Academy English-Burmese Illustrated Dictionary*. Rangoon : 1962. U Tin Tun, *The Concise English-Burmese : Burmese-English Dictionary*. Rangoon : 1964. *Khit Thit English Burmese Dictionary*. Rangoon : 1965. 等がそれである。

ところで、ここでとりあげたバハン博士編の英緬辞典は、1951年の第1部からはじまって1966年に第10部が完成した事からもわかるように、実に息の長い労作である。もちろん編者は多数の人、特にラングーン大学の U Wun, 女婿の U Tin Thein 等の協力の下に、この辞書を編纂したわけだが、これだけ丹念にまとめあげた英緬辞典は、U Tun Nyein, *The Students English Burmese Dictionary*, supplemented by U Tun Aung Gyaw. Rangoon: 1957. を凌駕するものといっても過言ではないと思われる。ただ難点をいえば、発音符号が全く附せら

れていない事で、在来の英緬辞典に残されていた課題の一つが未だ解決されていない点にある。対象言語の何語たるかを問わず、これからの辞書編纂には国際音声符号による発音表記が不可欠条件の一つである。

ともあれ、本書は、収録語彙の量はもちろんのこと、例文もふんだんにとり入れられており、英語を学ぶビルマ人にとって、有益なガイドの役目を果たす立派な辞典の一つだといえよう。

編者のバハン博士は、第二次世界大戦中、日本の軍政下において、ビルマ学芸院の辞書編纂部のスタッフをつとめた経歴をもつ人物である。

ビルマにおける辞典編纂の現状をうかがい知り得る一つの代表例として、本書を紹介したい。

（大野 徹）

Bo Taya. *Yebaw Thong-gyeit Pyidaw byan-gan*. Rangoon : Hkyobu-sabay, 1966. 227 p. (ボウ・ターヤー著『三十志士の凱旋』)

第2次世界大戦の勃発に伴って、反英独立を主張するドウ・バマーアシーアヨウン（別名タキン党）は官憲の弾圧によって地下活動を余儀なくされたが、党書記長のタキン・アウンサン（逮捕状が出ていた）は海路中国へ脱出、日本軍憲兵神田少佐の手引で東京に向かった。いったんひそかにビルマに帰ったアウンサンは、同志を募り「南機関」の下で軍事教練を受けビルマ独立軍を結成、日本軍のビルマ進撃と同時に、タイからビルマへ凱旋したことは、今日ではあまりにも有名な歴史的事実である。

このビルマ独立軍の母胎となったいわゆる「三十人の志士」達、およびビルマ独立軍に終始一貫援助指導を与えた大本営直属の「南機関」等に関する信頼すべき資料が、日本側の記録であることはいうまでもないが、反而ビルマ側の記録はさほど多くは知られていなかった。

本書は純粹の学術研究書ではないが、元「三十人の志士」の一人ボウ・ターヤーが、自己の体験を基にまとめた一種のドキュメンタリー文学として一読に値する。海南島に特設された陸軍士官学校での「三十人の志士」達の猛訓練ぶりから筆を説き起こし、バンコクでのビルマ独立軍の編成、3隊に分かれてのビルマ進撃、そしてついに著者の郷里ピンマ